

豊臣秀長

PHP研究所

定価二二〇〇円



豊臣秀長

PHP研究所

定価二二〇〇円



ISBN4-569-21525-4 C0093 ¥1200E

〈著者紹介〉

堺屋太一(さかいや・たいち)

〈略歴〉 昭和10年大阪生まれ。東京大学経済学部卒業とともに通産省に入る。通産省時代に日本万国博覧会を企画、開催にこぎつける。その後、沖縄海洋博や将来のエネルギー安定をめざすサンシャイン計画を推進する。昭和53年通産省を退官、執筆・講演活動に入る。現在は「大阪21世紀計画」のプロジェクト・リーダー、アジアクラブ理事長として活躍している。

〈著書〉『油断!』『団塊の世代』『危機と克服の断章』『巨いなる企て』『群化の構図』『日本人への警告』『峠の群像』『峠から日本が見える』『歴史からの発想』『次代思考の座標軸』『イベント オリエンテッド ポリシー』など多数がある。

豊臣秀長 下巻

ある補佐役の生涯

一九八五年六月五日 第一版第一刷発行

一九八五年七月十九日 第一版第七刷発行

著者 堺屋太一

発行者 江口克彦

発行所 PHP研究所

〒601 京都市南区西九条北ノ内町十一

電話 (〇七五)六八一—四四三一

東京事務所(〇三)二九五—九二二一

印刷所 大日本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたしません。

目 次

敗走の功 5

試練のとき 27

強きに流れる 46

補佐役の気働き 65

文治派の台頭 84

待つことの勇氣 102

捨てる者の心 137

村重謀叛 155

補佐役の心得
170

不吉の彗星
192

変事
209

天王山
238

天下への坂
248

最後の苦闘
273

あとがき

敗走の功

一

京の街は活気を帯びている。

新將軍・足利義昭の居城、二条城の工事が急速に進んでいる。御所の修理も大々的に行われているし、寺院の修繕も盛んだ。諸国から集まった將兵と人夫たちで、街は騒々しいまでに賑やかだ。物資も豊かになった。各地の関所が廃止されたので、各方面から産物が大量に入り、安価に売られ出した。京の品物もまた遠い所にまで大いに売れるようになった。高価な絹織物、雅な染め物、金物細工に仏具經本などの需要が増え、手工業者も商人も忙しい。勿論、將兵と人夫を相手にする女たちの数もおびただしく増加している。

永祿十二年（一五六九）旧曆十月、伊勢征服を完了した織田信長が、京に凱旋した時に見たのは、そんな風景であった。

「藤吉郎も、ようやくとるわい」

信長は甲高い声で満足気にそういった。伊勢の軍事攻略における滝川一益の働きと、京の行政における木下藤吉郎秀吉の手腕とが、この時期の信長を大いに喜ばせた。

〈確かに兄もようやる……〉

この信長の言葉を伝え聞いた木下小一郎秀長は、よき兄を誇りに思った。京の安定と繁栄の功績の幾分か、織田家の京都奉行の一人・木下藤吉郎にあることは疑いもない。小人、足輕という最下級の身から出発したにもかかわらず、兄は高貴な人々の雲集する都でも今や臆することがない。出自の賤しさに対するこだわりも消えたとし、古い仕来りにとらわれることもない。主君・信長の性格と政策をそのまま反映させた木下藤吉郎のやり方が、古都に積ったしがらみを打ち破り、物事を単純化して、かえって万事を円滑にしているのだ。京人の陰湿な抵抗を排するために、木下藤吉郎のような全くかけ離れた男を奉行に就けた信長の人事は巧妙かつ効果的であったといえる。

織田信長は、こうした兄の功績を認めて、また一段と地位を高めてくれた。つい三年ほど前までは雲上人のように思えた信長の側近・武井夕庵の上位に置かれたのだ。但し、禄の加増は案外少ない。能力ある者には惜しみなく権限を与えるが、禄は比較的低く抑えて、家中のバランスを保つのが、信長流の人事管理、人材登用術である。このため、木下藤吉郎の指揮下にある京都駐留軍の大半が織田家からの「借物」で、木下家自身の家中は少ない。内部の調整に当る小一郎には、依然として苦勞が尽きない。

しかも、小一郎の仕事はそれだけではない。兄の地位が高まるにつれて、その第一の家臣である小一郎も注目されるようになった。京都奉行に取り入ろうとする者はみな、その弟にもすり寄って来る。貴人高僧から大名や商人座頭まで、いろんな連中が小一郎を訪ねて来る。

へしんごい事や

と、小一郎は思う。二十歳過ぎまで尾張・中村郷の百姓であった身には、都の高貴な人々と付き

合う作法がひどく窮屈だ。長ったらしい文章の往来も面倒だ。しかも、彼らの持つて来る話はみな複雑でこみ入っている。都の者はみな、気の遠くなるような昔から説き起して「我が家の土地を何某が……」と権利回復を訴えたりする。だが、その相手方もまた同じことをいう。どの時代を基準にするかで正邪が変るのだ。

小一郎は、少しでも重要と思う問題は兄にそのまま上げる。しかし、細かな事は自分の判断を付けて兄に伝えて、決済のみ仰ぐ。そうでもないかと、兄が多忙になり過ぎるからだ。

これまで、木下組の内部調整に当って来た小一郎の経験は、京の行政にもある程度役立った。しかし、これまでは経験しなかった問題も沢山ある。その一つは、織田家に降った新付の諸將との関係である。彼らを監視するのも、京都奉行とその幕僚たちの重要な——恐らくは最大の——仕事なのだ。

新付の者、といっても、美濃や伊勢で帰服させた小豪族や地侍とはわけが違ふ。多くは一城の主であり、自立した大名だった者どもだ。しかも、畿内の要地を治めていただけに誇りも高く顔も広い。情報網もしっかりと擱んでいるし、婚姻によって高貴な人々とも繋がっている。そして何よりも、歴史の古い土地特有の面従腹背の世渡りの術を心得ている。わざわざ小一郎などに接近して来る者は、中でも世故に長じた連中である。

京に戻ってしばらくした頃、その一人、松永弾正久秀なる人物が小一郎を訪ねて来た。阿波の三好家の被官から出発して力を蓄え、自立の大名に化し、時には三好三人衆と戦い、時にはこれに服したり和したりして、長く京都周辺を支配した老狐である。

「木下殿には恐れ入りますわい。わしらが長く困こまり果てりました事々を、木下殿はいとも容易たやすす

う解決なさる。流石は織田家第一の才覚といわれなさるだけの御人じゃ」

今は織田家に帰属する一将となった松永は、人なつっこい微笑を老いの目立つ頬に刻んで、そんなことをいった。前將軍・足利義輝を攻め殺した陰謀家とは、とても思えぬ愛想の良さだ。

「いやいや、我らは下賤の出。兄とて去年までは京の香りとて嗅いだことのない田舎者です。弾正殿にはいつもようして頂いておると兄も常々申しております」

小一郎は、尾張訛を隠して、ソツのない言葉を返した。兄が八方破れとも見える尾張風で押し通しているとすれば、その補佐役の弟は普通以上に丁重でなければならぬ。兄弟共に威張っていると見られたのでは都人の反感を買う。部下の將兵も必要以上に威張った形になる恐れもある。だが、あまりにへり下つてなめられてもいけない。ただでさえ都人たちはみな、内心、尾張者を蔑視しているのだ。

「我らは、織田家中でも、木下殿を無二のお人と心得とりますよつてな」

松永久秀は、小一郎の耳元に口を寄せてそう囁いた。この一言こそ老獪な松永のいたい所に達しない。勿論、小一郎の口からそれが、兄・藤吉郎に伝わることを計算しての上である。

「これはまた、過分な御言葉で……」

小一郎は、曖昧に笑った。

向背常なき松永彈正の言葉ほど信用できないものはない。この男が京都奉行の身边に間者を入れていろいろしい事は小一郎も知っている。決して兄を信頼しているわけではあるまい。

勿論、織田家からも木下家自身も、松永の側近を懐柔して監視しているのであるから、お互い様ではある。松永久秀だけではない。大和の筒井氏にも摂津の伊丹城や池田城にもそれはしてある。

そしてそうした者たちからの報せが数多く小一郎の手元には集まってくる。多忙な兄に代って、小一郎は第一次的な情報の収集と分析を手伝っているのだ。

その中には、この男、松永弾正久秀の不審な動きを伝えるものも珍しくない。だが、あまりに疑い過ぎるのも危険だ。新付の者の疑惑をいい立て、その実、織田勢力の離反内抗を謀む者も少なくない。それも敵ばかりではない。本当の味方の中にも、内部のライバルの失脚を願ってそんなことをする者がいる。あまりにも急速な藤吉郎の出世は人々の嫉妬を招くに十分だ。それだけに、生の情報を得て取捨選択する小一郎の役目は難しい。小一郎の見る所では、苛烈な主君・織田信長に仕えているせいか、兄は少々猜疑心が強過ぎるようにも思える。

こうした小一郎の基準から見ると、松永久秀は、今のところ「白」だ。池田も伊丹も和田も筒井も大丈夫といえる。だが、一つだけ、どうにもよくない所がある。完成間近い二条城に鎮座する將軍・足利義昭である。

二

永祿十二年秋、一カ月あまり京に滞在した織田信長は、十月十七日に京を発して岐阜に引き上げた。京には木下藤吉郎のほか、丹羽長秀、明智光秀、中川重政、細川藤孝らを残した。夏よりは京の留守を手厚くしたのは、差し当り東に戦さの臭いがなかったのと、畿内に気になる様相があったからだ。そして、その最たるものが、將軍・足利義昭に起因していたことは間違いない。義昭の反織田行動はますます露骨になっている。

のちの歴史を知る者の目には、この頃の義昭の動きは、いかにも馬鹿氣な誇大妄想のように思え

るかもしれない。結果から見ると時代は既に変り、足利幕府などは過去の亡霊になり果てていたことが、誰にでも分るからだ。

だが、この時代に生きた人々は、勿論その結末を知らない。足利幕府は絶えることなく継続しているであり、信長のような現実主義者でさえも利用したくなるほどの権威らしきものがまだ残っていたのである。事実、信長は、義昭という「玉」を得たことで上洛を果した。それは、信長にとっての成功であつたと同時に、義昭にとつての成功でもあつた。

「我が足利家の威信はなお根強い……」

足利義昭とその側近たちがそう思つたのも、当人の身最屑を含めて考えれば不思議ではない。そしてその事が、この野心家に、足利幕府の実態的な復活を夢見させた。

織田信長の周到な準備と果敢な行動とで、思いもかけぬほど早く京に上り將軍位に就いた足利義昭は、一時的な狂喜からさめると、名と実の差に気が付いた。この野心家は將軍位の有名無実を嘆き、天下の政務を専横する信長を怨んだ。この男は元々、足利幕府を復興するために尾張の新興大名を利用したのであつて、信長を天下人とするために、そのお飾りになつたのではない。

「織田が強大になり過ぎてはいかん」

義昭はまず、そう考えた。この男にとつて、それは本能的ともいつてよいほどに自然な発想だつた。本来、足利幕府なるものは、鎌倉幕府や徳川のそれと異なり、きわめて統制力の弱い政体である。管領家をはじめとする各地の守護、地頭が強力な独立性を持ち、將軍はその連合体の長ともいうべき形でトップに載つかつていたに過ぎない。將軍家は本来さして強くないが、これをくつがえすほどの優位者が他にいないから地位と權威が保てたのだ。

当時の人々の多くは、そもそも幕府とはそんなものだと思っている。勿論、足利義昭もその一人だ。この俄か將軍は、特定の一人に圧倒的な力を持たせさえしなければ、微力な自分にも幕府復興のチャンスはあると信じている。つまり、常に第一位の挑戦者を叩くことが、足利將軍の処世術なのだ。そんな政治風土に育って来た義昭は、上洛した織田信長が、またたく間に畿内の小大名を服属させ、諸都市に代官を置いて矢銭を徴し、伊勢、伊賀方面まで征服するのを見ると、胸騒ぎを禁じ得なかった。まして、その信長が「殿中掟」を定めて、「副状なしに御教書を出してはならぬ」などといい出したのだから腹立しい。

〈信長め、たかが尾張の出来星大名のくせに、多少の手柄でつけ上っておる〉

義昭はそんな風に考え、信長に対する不快感を強めた。そしてそれが、

〈懲らしめてやろう〉

という思い上りになって行った。

武力の乏しい將軍義昭が使える手は、諸方の大名に呼びかけて反織田勢力を結集することだ。この年の暮になると、義昭は密かに諸国の大名と提携して権力の拡大を図り出した。多分、義昭は、諸大名の力を背景にして信長と折衝し、実権の一部を回復することぐらいを求めたのであろう。足利將軍の権威を過大評価していた義昭は、諸方の大名を競い合せて自ら仲裁者たろうとしたのである。それが、足利將軍本来の機能であり権力だったからだ。

しかし、織田信長の立場はそんな生易しいものではない。義昭を將軍に就けてやった信長は、最早將軍の権威などで大名間の武力闘争が調停できるものではないことをよく知っている。足利義昭のやっていることは、信長の生命と織田家の存立にかかわる重大な裏切り行為なのだ。

織田信長の怒りは大きかった。だが、足利義昭を直ちに殺すことも追いつくこともできない。自ら將軍にした男を一年や二年で廃したとなれば、天下の信を失う。織田家が畿内を占領している根柢もなくなくなる。そして何よりも、諸大名に「織田討伐」の口実を与え、各地の土豪や寺社に反乱の契機を与える。今の織田家は、この総てに対応できるほどには強くないのである。

信長は、足利義昭の策謀を苦々しく思いつつも、手荒なことはできないわけだ。そしてそれと知っていればこそ、義昭の動きはますます露骨で大胆になった。

「困ったもんじゃのお、あの公方様は……」

京都奉行として義昭監視の任にある木下藤吉郎も、小一郎にしばしばそういった。

だが、苦しみ苛立っていたのは織田方だけではない。足利義昭の方もそれに劣らず焦っていた。諸方の大名や寺社に反信長の決起を呼びかけても「おいそれ」と動く者がいないのだ。武力の乏しい足利將軍としては、「密書」に応じる有力者がなければ、一人角力にもならない。まるで壺の中で泣きわめいているようなものだ。

こうした双方手詰りの陰気な対立の中で先手をとったのは織田方だ。織田信長はまず、近隣の大名家に「踏絵」をさせることにした。来年の正月には京に出仕するように、と畿内とその周辺の大名家に命じたのだ。

畿内の小大名はみなこれに応じた。年来の同盟者、徳川家康も浅井長政も否とはいわなかった。だが、越前の朝倉義景だけはこれに応じなかった。

へやっぱりそうか……」

と信長は思った。朝倉は足利義昭との縁が深い。織田家に来るまで義昭を養っていた朝倉家とし

ては、義昭を得てからの信長の成功が腹立しい。今更のように、將軍を担いで上洛しなかったことが悔やまれる。そこへ遅ればせながらも、將軍の密書を得たのだから、折あらば織田を討ちたい気持が強いのも当然だ。

だが、朝倉は、実力と勇氣に欠けていた。単独ではかなわぬと見て、反織田の大同盟ができるのを待った。東の武田、西の毛利にも手を伸ばし、阿波に敗退している三好衆にも呼びかけているらしい。信長の同盟者であり妹婿でもある浅井長政にも誘いかけたが、織田、朝倉双方に義理と縁のある浅井は乗らなかつた、という話もある。

〈先制攻撃をかけてやろう……〉

織田信長は密かにそう決意した。

永祿十二年十二月、信長は、近江で相撲を催したり鷹狩りを行ったりしながらゆるりと上洛。京で朝廷に献金をしたり、足利義昭に再度、御内書發布を禁ずる注意を与えたりして過ごしたが、その間にも越前攻めの構想を練っていた。

「四月に將軍の御城が完成する。大いに馬揃えを行う故、その準備をせよ。諸国より五万余が集まる。兵糧を京に積んでおけ」

信長は、木下藤吉郎にそう命じて岐阜に帰った。

「えろう大そうな事やなあ……」

兄からその話を聞いた小一郎は、ちよつと首をひねった。馬揃えとは、観兵式のことである。美々しく飾った武者が並ぶ行事だが、それにしても五万人は多い。観兵式で一望できる人数はせいぜい数千である。

「信長様のお考えは、いつも凡者の及ばん所じゃ。兵糧ばかりやない。鉄砲も弾ぐすりも用意せにやのお」

兄はニヤリとしてそういうのだった。

〈裏がある〉

小一郎は、兄の言葉からそれを感じ、直ちに資金を集めにかかった。この頃、鉄砲は堺特産の新兵器である。堺を支配下に治めた織田家はその調達に有利な立場にあったが、値段はすこぶる高い。これを多数調達するには、大変な資金が要る。藤吉郎・小一郎の兄弟は、木下家の預かる資金に京都奉行所の持金をはたいて鉄砲を買い集めた。彼らの予想は的中した。そればかりか、結果的にはこれが兄弟の生命を守り、出世の道を開くことにさえる。二条城完成を祝し終えるや否や、信長は京に結集した全軍に、越前攻めを発令した。それが、長く苦しい戦さへの出発となったのである。

三

永祿十三年（この年は途中で元号が変り、元龜元年となる）四月二十五日、織田信長の大军は、若狭から越前、敦賀に侵入した。木下藤吉郎秀吉の部隊は、織田軍の先頭に近い所にあった。前後には、柴田勝家、池田恒興、それに援軍として加わっている三河の徳川家康らの部隊がいた。

木下小一郎秀長は、この木下軍の本陣、兄・藤吉郎の側にいた。ようやく木下家でも家臣が増え、先陣の戦鬪部隊や後方の輜重を指揮する適任者ができたため、兄は小一郎を使い易い主計將校兼副司令官に仕立てたのだ。